

■ PCN だより

PCN Volume 68, Number 11 の紹介

2014年11月発行の *Psychiatry and Clinical Neurosciences* (PCN) Vol. 68, No. 11 には, Regular Articles が4本掲載されている。今回はこの中より海外から投稿された3本の内容と, 日本国内からの論文については, 著者において日本語抄録をいただき紹介する。

(海外からの投稿)

Regular Articles

1. Methodological challenges in studies of bright light therapy to treat sleep disorders in nursing home residents with dementia

E. S. van der Ploeg and D. W. O'Connor

School of Psychology and Psychiatry, Monash University, Melbourne, Australia

認知障害の介護施設入所者での睡眠障害を治療するための高照度光療法の研究における方法論上の課題

【目的】認知障害があることの多い介護施設の入所者や長期滞在型高齢者医療施設の患者での睡眠障害の治療法としての高照度光療法の有効性について, これまで多くの研究が進められてきた。最近実施された10件の研究を対象としたCochrane Collaborationメタ解析では, ほとんどの研究に方法上の問題点があったため, 治療の有効性を評価するのに十分なエビデンスはなかったと結論づけられた。そこで, 今後の研究での研究方法の指針とするための提案を行うことで, われわれはこの状況を改善しようとした。【方法】文献を検討することや, われわれ自身の臨床経験や研究の経験をもとに, 高照度光療法の治療効果を明らかにできる可能性を最大限に高める, 研究デザインや被験者の選択, 光照射法, アウトカム評価項目に関連する一連の提案を策定した。次に, すでに発表されている全ての実験的研究が, これらの提案に沿ったものであるかどうかについてチェックした。【結果】われわれが設定した選別判定基準を満たした過去20年間に発表さ

れている18件の研究のうち, 半数の研究が睡眠障害の被験者を選択していた。11件の研究では重篤な視力障害者を除外しており, 7件の研究では睡眠の臨床レーティングを含めており, 5件ではベースライン時の照明レベルを測定していた。ほとんどの研究では精神作用薬の処方についてチェックしていたが, 試験期間中の処方の変化について報告した研究はほとんどなかった。ほとんどの研究では, 治療アドヒアランスをチェックしており, 社会的接触の量の違いについての何らかのコントロールを含めていた。【結論】介護施設の入所者における高輝度白色光治療の有効性を示すエビデンスはまだ確定していない。研究者が研究方法を改善させ, より統一したアプローチを採用すれば, このエビデンスの質が向上すると期待している。

2. Gonadotrophic hormone and reinforcement sensitivity systems in women with premenstrual dysphoric disorder

C-H. Ko, C-Y. Long, C-F. Yen, C-S. Chen, P-W. Wang and J-Y. Yen

Department of Psychiatry, Kaohsiung Municipal Hsiao-Kang Hospital, Kaohsiung Medical University, Kaohsiung, Taiwan/Department of Psychiatry, Faculty of Medicine, College of Medicine, Kaohsiung Medical University, Kaohsiung, Taiwan/Department of Psychiatry, Kaohsiung Medical University Hospital, Kaohsiung, Taiwan

月経前不快気分障害の女性における性腺刺激ホルモンおよび強化感受性系

【目的】行動抑制系と行動賦活系 (BIS/BAS) が, 嫌悪刺激と報酬刺激に対する感受性をそれぞれ決定する。本研究は月経前不快気分障害 (PMDD) のBIS/BASを評価し, BIS/BASに対するエストロゲンとプロゲステロンの作用について調べることを目標とし

た。【方法】治療を受けていない PMDD の女性と対照被験者を地域から採用した。精神科問診と 2 月経周期の追跡結果をもとに PMDD と診断した。PMDD の女性合計 67 例と対照被験者 75 例を採用し、最終分析に含めた。月経前期と卵胞期の両方で、BIS/BAS スケールを用いた評価を行い、またエストロゲンならびにプロゲステロンのレベルを測定した。【結果】得られた結果から、PMDD の女性では、月経前期と卵胞期の両方で BAS スコアが高いことが明らかになった。プロゲステロンレベルは、刺激探究 (fun-seeking) スコアと負の相関関係を有しており、月経周期におけるプロゲステロンの変化も、PMDD の女性での刺激探究スコアの変化と負の相関関係を有していた。PMDD の女性では、月経前期の BIS スコアがより高く、BIS スコアはそれらの女性での抑うつ、不安、敵意と相関関係を有していた。【結論】以上の結果は、PMDD の女性での報酬に対する感受性が、月経周期でのプロゲステロンレベルの変動の影響を受けやすいことを示唆するものである。さらに、有害刺激に対する感受性が、PMDD のコア症状に重要な役割を果たしている。PMDD での強化感受性については、さらに詳しく研究する必要がある。

3. Hemodynamic monitoring of middle cerebral arteries during cognitive tasks performance

M. Boban, P. Črnac, A. Junaković and B. Malojčić
Department of Neurology, University Hospital Centre, Zagreb, Croatia/School of Medicine, University of Zagreb, Zagreb, Croatia

認知課題実施中の中大脳動脈の血行力学的モニタリング

【目的】本研究の目的は、中大脳動脈の血流速度 (BFV) をモニタリングするための、BFV の変動の時間的パターンと半球優位性について調べ、様々な認知課題の適切さを評価することである。【方法】年齢 20~26 歳で、右利きの健常被験者 14 例で、音素流暢性検査 (phonemic verbal fluency test: pVFT), Trail Making Tests A および B (TMTA ならびに TMTB), Stroop テストの実施中に MCA の BFV を同時測定した。【結果】全ての認知課題実施中に、両半球の MCA の BFV が有意に上昇した。2 つの刺激が一致しない Stroop テストの実施中に、統計的に有意な半球優位性

が見つかった。一方、TMTB が MCA の血流速度の活性化能力が最も高いことがわかった。【結論】われわれの得た知見から、MCA の BFV をモニターするための最も適した認知検査法は TMTB であることがわかった。

(文責：仙波純一 PCN 編集委員)

(日本国内からの投稿)

Regular Article

1. Cross-cultural measurement equivalence of the Japanese version of Revised Conflict Tactics Scales Short Form among Japanese men and women

M. Umeda and N. Kawakami

短縮版改訂コンフリクト・タクティクス・スケールズ (CTS2SF) の日本語版開発と日本人男女における信頼性・妥当性の検討

【目的】短縮版改訂コンフリクト・タクティクス・スケールズ (Revised Conflict Tactics Scales Short Form: CTS2SF) は、過去 12 ヶ月間のパートナー間暴力 (Intimate Partner Violence: IPV) の加害と被害を測定する尺度である。本研究では CTS2SF の日本語版を開発し、日本人男女におけるその信頼性と妥当性を検討した。【方法】インターネット調査会社に登録している日本人男女 (393 名) に 4 週間の間隔をあけて 2 度のインターネット調査を行い、日本語版 CTS2SF を用いて過去 12 ヶ月間の IPV 加害・被害の頻度を測定した。【結果】クロンバックの α は、性的強要サブスケールの被害 ($\alpha = 0.18$) を除き 0.5 以上であった。再テスト信頼性は、IPV の頻度を測定した場合に比べ (Spearman's rank correlation, 0.38~0.70), IPV の有無を 2 値で測定した場合 (Yule's Q, 0.79~1.00) の方が高かった。攻撃性 (Buss-Perry Aggression Questionnaire), IPV 被害 (Violence Against Women Screen), 心理的抑うつ (K6) との関連から、おおむね良好な基準関連妥当性が確認された。探索的因子分析の結果、3 因子の構造が見出された。【結論】日本語版 CTS2SF は、一部のサブスケールで内的一貫性が低かったものの、限られた質問項目数で IPV を測定する必要のある調査では、十分な再テスト信頼性、基準関連妥当性、因子的妥当性を有していると考えられる。